

中野重治全集

第二卷

筑摩書房版

中野重治全集第二卷

昭和三十四年六月十日 発行

定価 四九〇円

著者 中野重治

発行者 古田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 勝畑四郎
東京都三鷹市上連雀九九〇

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(29)七六五一(代電)
振替東京 一六五七六八
印刷 株式会社三省堂
製本 株式会社商陽堂

Nakano (Printed in Japan)

目次

第一章	三
鈴木・都山・八十島	四
村の家	五
同窓会	一六
一つの小さい記録	二六
小説の書けぬ小説家	二五
車掌二人	一八
谷口タニ	一四

むし暑い日	二〇三
伯父さんの話	二九
汽車の罐焚き	二四九
旧友	三三
原の櫛	二四〇
演習	三五七
空想家とシナリオ	三六
汽車のなか	四六一
留守	四九〇
娘分の女	五〇八
鶉の宿	五九

中野重治全集 第二卷

第一章

「じゃあ、おれや帰るからね。頼むよ。」

そういつて立ち上ると、田原は、「ああ失敬」とか「御苦労さん」とかいふ六七人の挨拶を聞きながら玄關へ出て行つた。そうして靴をはこうとして屈みこみながら、眠い眼を力を入れてきゆつきゆつと二三度つぶつた。

「あ、田原……」という声がした。田原がふり返ると、後を追つてきたらしい染谷が片手を帯にさして、仰向き加減にした額へもう一方の手をあてて立つていた。「あれや……島崎の分はどうしようか？」

「島崎？」精も根もつきはてたような染谷の声を聞くと、約束を守らぬ島崎にたいする不満がかえつて染谷の方へ流れそうになつてくるのに田原は自分で気づいた、「どうしようかつて、こないだ決めた通りでいいんじゃないのか？」

「ん……」染谷は顔をいつそう仰向け加減にして額をこすつた。それが田原には、「いや、それやわかつてるんだがね。あいつの分が尻切れとんぼだし、いつ帰ってくるかわからんし、責任は俺の方へかかつてくるんだからね。わかつてるじやないか……」とでもいつてるように見えた。「じゃ適當にやつと

「けぼろね？」

「あ、頼む。」

短く言いきつて田原は玄関を出た。四月になつたばかりの朝の空気はまだかなり寒かつた。彼は始発電車の音が聞え出してきた時から早くそれにあたりたいと思つていた。染谷たちと一しよに一昨日の夜中から三十時間以上ぶつ続けに仕事をしてきて、今朝の夜明け頃には頭がぼんやりしてきていたが、昼前のうちに片づけねばならぬ仕事がもう一つあるので冷たい風ですつぱりと眠気を吹き払つておきたかつた。

「島崎が悪いんだ。」と考へながら彼は急いだ、「あんな法つてあるもんか！」

島崎は十日ほど前、父の住んでいる仙台へ出かけていた。だんだん仕事も忙しくなるので、家の始末もつけてくるというのが理由だつた。最初島崎が仙台行きを申し出た時みんなはへんな顔をした。田原たちには、今はそんなことをいつている時でないという気がしていた。去年の秋はじまつた満洲戦争は上海攻撃にうつつていた。この上海攻撃はまつたくの抜打ちで、そのため国家の軍需工場ではまにあわなくて刑務所が動員されたほどだつた。将校が刑務所へ出かけて行つて直接監督をした。徹夜作業の時には刑務所長が工場へやつてきて監視台の上から囚人たちを激励した。この時の刑務所工場の仕事は戦争の後方作業に一つの決定的な力を与えたもので、その成功は金で換算することができないといわれていた。その結果司法省が新しく資源局の網の目に編みこまれた。新聞や雑誌に出る戦争の話そのものも新しい特徴を見せていた。戦争に反対したために銃殺された下級将校の話や、やはり戦争に反対したために内地へ送り返されたある大部隊の話などが噂として伝わつていた。満洲パルチザンの闘争は人々に

生き生きとしたぬくいあるものを吹き送った。あるプロレタリア的な雑誌には、日本軍の中へ支那人の手で配られた日本文のピラが、それを送つてよこした日本兵卒の手紙つきでのつていた。馬賊という言葉がいつのまにかなくなつて、匪賊、兵匪、共匪というような言葉が出来ていた。何よりも日本軍の損害の大きいことと永続的なことが目だつた。上海攻撃ではことに損害が大きかつた。支那軍の指導部と日本軍の指導部とが、上海地方での赤色兵士の活動に対して共同動作をとることを宣言するまでになつていた。日本軍は上海ではじめて市街戦を学んだといわれた。内地では、北海道と東北地方の数県とが恐ろしい凶作に見舞われてそれが饑饉に發展していた。新聞は食える泥の発見について書きたてた。その地方の農民の活動の指導的分子は新しい規模で追求されていた。婦人売買の波は乏しい村々から娘という娘を洗い去つていた。そしてその地方の兵卒が戦争に出ていた。戦争の帝国主義的性質と農業恐慌の本質とが一般的に明るみに出かけていた。こういう事情をその特殊性をとおして正確に反映させ、そこからの逃れ路を示すことが染谷たちの編集している『文学新聞』の仕事だつた。

しかし去年の秋新しく『文学新聞』がつくられて以来ずっと、人手の不足と能力の不足とが非常に強く感じられていた。染谷、永田、中川、島崎、田原、そのほか何人かの作家、画かきが仕事をしていたが、彼らは編集についても経営についても、はじめてぶつかる問題の重大さに追われて喘ぎ喘ぎ駆けていた。彼らはすべての問題を政治的に取り上げねばならなかつたと同時に、政治新聞から区別されたものとして『文学新聞』を出さねばならなかつた。彼らはすべてをしようとした。去年の春から問題になつてきた作家とプロレタリアートとの新しい革命的な結びつき——そのことの一つの現われが『文学新聞』の創刊だつた。——のためにすべてを学ぼうとしていた。論理的思考に最も不慣れな、ときには不向

きな作家さえが哲学を読みはじめた。「物質とは客観的實在を言いあらわすための哲学的範疇である。」
そういう措定が感覚を伴つてのみこまれていつた。作家の世界観の高い革命化——この展望の実現のために彼らは文字通り死物狂いになつていた。彼らは作家の組織のうちに一国的なや地方的なや、いろんな結合をつくらねばならなかつた。いろんな産業のそれぞれの地域に出来た文学サークルに出かけねばならなかつた。(そのサークルは文学サークルというよりも文化サークルといった風なものの方が多かつた。そのため、その発展に応じて文学サークルなり演劇サークルなりに分けてそれぞれの藝術組織へつながらねばならなかつた。) 彼らは講習会を組織せねばならなかつた。文学雑誌と文学新聞とを出さねばならなかつた。国際組織との結合を發展させねばならなかつた。いろんな問題で、革命的な労働者組合、農民組合、青年同盟、党などと直接的にか間接的にか協力しなければならなかつた。(党は黨員を一人人へという合言葉で組織の大衆化の道へ出ているという話だつた。) 彼らは伝統的に不得手な金のやりくりを熟練しなければならなかつた。すぐ鼻のさきには過去一年間の総決算としての年次大会が控えていた。同時にメーデーが控えていた。最も強い作家は、こういう重なり合つた仕事をすべてやりながら千枚二千枚というスケールで日本の革命運動のそれぞれの歴史的時代を肉づけようとしていた。彼らは時計の針を見い見い仕事していた。人手の不足、能力の不足、時間の不足、そういうさなかへ島崎が仙台行きを持ちだしたのだつた。

最初非法グループで——そこへその時は島崎も出ていた。——その話が出た時、聞いていたものはあつけにとられた形だつた。島崎の話では三日もあればすむということだつたが、家の始末という言葉の具体的な内容は説明されなかつた。破産の後始末とか親たちを東京へつれてくるとかいうのでないこ

とはわかりきつていた。それなら？ 三日ぐらいですむこと、彼自身説明しないこと、それに島崎という男の性質についてグループのものに知られている限りのことを結びつけてみて、それは、島崎が今後、親たちが望んでいた大学講師などになるのではないということとを彼らに了解させに行くという程度のこととしてしか受け取れなかつた。彼らはその疑問をそのままの形では出さなかつたが、島崎自身それを予想していてそれを肯定するような態度を見せていた。「三十すぎて子供まで持つてゐる奴が何だ！」というのが島崎以外のものの肚だつた。しかし田原がとりなした。一つには彼の氣弱さからでもあつたが、島崎のようなたちの男には仙台行きを許す方があととよいように思われたからでもあつた。彼らは島崎に四日の期限を切つた。しかし四日たつても島崎は歸つてこなかつた。グループは田原の名で電報をうつた。あと二三日で歸るといふ返事がきた。しかしその三日目にもまだ歸らなかつた。グループは二度目の電報をうつた。するとイサイフミという返電がきた。みな腹を立てた。しかしその上電報をうつことは憚られたので彼らはじりじりしながら待つた。そして十日以上になつても島崎自身もフミも来なかつた。

島崎が十日以上歸らないことには『文学新聞』でも困つてゐた。その年の一月ごろ『文学新聞』は一つのかかなり大きな過ちをしてゐた。働き手を戦争に取られた饑饉地方の農民にもつと強く力添えしようという目的から、彼らのために出征兵士遺族慰問金募集の呼びかけを発表したのだつたが、そのことで新聞は、意志に反して、遺族の生計のためには同情金を集めるからせつかく戦争に出て行けという政府系の活動に力添えすることになつた。しあわせとこれは氣がついて中止された。このことは問題の取扱ひ方ということについて手いいたい教訓を与えた。その教訓をどこまで受け取つたかが検べられるような

問題は次々に生じてきたが、今度の号にも、比較的小さい問題だったがそれがあつた。フランス共產党に属するある革命作家が、階級的文化についてのまちがつた意見を出して子供らしい分派をつくりかけていた。それを『文学新聞』としてはつきりさせねばならなかつた。それから「スターリンが文学について演説をした」というニュースがはいつてきて、その演説が日本の文学運動の欠陥に——欠陥があると思われた。——深くふれてゐるに違ひないと思われるのに演説の内容がわかつてゐなかつた。そのフランス作家の批判とスターリンの言葉の紹介とが、外国語と外国の事情とに明るい島崎にあてがわれた。島崎はそれを引き受けたまま仙台へ行つたなり仕事をとどけてこなかつた。新聞は発行日をおくらすわけにゐなかつた。新聞の編集局は——島崎の仙台行きはここでも何か積極的なものとしては受け取られてゐなかつた。——島崎の帰京が延びるにつれて強い不満を感じてきた。誰かほかのものにその仕事をさせることは、今となつては遅いし、また一人がいろんな仕事をするという伝統的な便宜主義から脱け出しかけた矢先ゆるされもしなかつた。前の非法グループでもこの新聞編集局でも、とりなしをした当人だけに田原は特別な責任を感じていた。

「あん畜生、ぐずのくせに手前のこととなるといやにできはきしてやがる。しかし眠いな……」と肚の中で呟きながら彼は急いだ。

夜明けの寒風にあたつたら眠気がさめるだろうと考えていたことは無駄だつた。原稿紙と煙草の煙とのなかで仕事していた間は仕事の勢いのなかへばかりこまれていた眠気が、外の寒い空気のおかげでかえつてはつきりと感じられてきた。冷たい空気のおかげで田原のからだそのものが一つの眠気——部屋のなかの温さをそつくり彼のからだなりに固定させた。——になつてくるような気がしてきた。前のめりに

急ぎながら彼は、時間があつたら一時間半ばかりも朝昼寝をしてやろうと考えた。

電車に乗るなり彼はうつらうつらしはじめた。彼は時計をぜひ一つ買いたいと思つたり、氣をつけて貯金をせねばなるまいと思つたりしてゐるうちに眠りこんだ。そして何かの拍子ではつとして眼がさめると、彼の降りるべき停車場を危く出るところだつた。彼はあわてて飛び出した。そして大股で家の方へ歩き出しながら、まだ眠つてゐるに違ひないれんの寝顔を思い出してゐた。それを始めて見つけた時の驚きに似た氣持ちは彼はつきり覚えてゐた。それは「子供の顔」としかいえない顔だつた。丸い顎と小さい鼻と赤い頬、その上のごく無邪氣な無表情、水平な仰向きを挟むように投げだした両腕。子供が「万歳！」をしてそのまま仰向けに眠りこんだような形だつた。田原は不思議な氣持ちでしばらくそれを見ていたが、後でそのことをれんにいうとれんは赤い顔をした。その後彼は、そのなかに彼女の非常に正直な性質と、ものごとをどこまでも論理的に追求していくことのできない悪い性質とを見るようになった。彼は彼女の善良さを愛してゐたが、仕事が困難と高い性質とを帯びていくようになってきたことから、多少とも身を入れてこの悪い性質を矯めていかねばならぬと思ひ始めてゐた。

しかし路地を曲ると彼は、雨戸の引かれた格子戸と、手拭をかぶつて箒を持ったれんが靴音を聞きつけて縁側へ出てくるのを見つけた。彼は垣根の青い葉越しに「もう起きてたのか？」と声をかけて玄關へはいつた。

「ええ。」といつてちよつと笑つて戸袋の蔭へ隠れたれんは、玄關の間へ出てくると心持ち田原の顔を見つめるような表情をしていて答えた、「今朝宮川が来たのよ。」

宮川はちよいちよいやつてくる所轄署の刑事だつた。

「ふうん……何てつて？」

「ただ、田原君いるかつて……」

田原の頭に十日前にやられた中川、大川、山口のことがひらめいた。とすぐ、それから四日目にやられた大久保のことがひらめいた。

流しへ下りて口を洗いながら、茶ぶ台を支度してゐるれんに彼は訊いた。

「何人で来たね？」

「一人だわ。」

「何時ごろ？」

「五時ちよつと前ね。寝てるところを起されたのよ。」

れんは田原の顔を見ないようにしてぼつりぼつり答えた。田原にはそれが、彼の判断に何かの暗示を与えはしまいかという彼女の無意識の気づかいの現われとして感じられた。同時にそうだとすれば、今朝の宮川が彼女にいつもとは違つた感じを与えたわけだと思われた。

五十日ほどまえ、党の市の組織の一部が破壊されていた。（田原にはそう思われた。）国会選挙があつて、市の電車経営のある労働者が「働くものに飯と仕事とを与えよ」という単純なスローガンを提げて立候補したが（そのとき田原は自分に選挙権のないことを残念に思つた。また現行法がそういう風に作られてるのではあるが、彼の仕事仲間の多くが、些細な手続きの怠りから選挙権を取り逃がしていることを思つた。また女に選挙権のないことから受ける損失の大きさを思つた。そして今まで取り上げていたものを与えようとすることで女をつかもうとしている敵の最近の方策と、そのための彼らのあれこれ

の準備を思つた。一方で労働者の、他方で党の支持を得たと同時に、選挙事務所が襲われて候補者も事務員もすべて持つていかれた。開票日に田原は近所の掲示板を見に行つた。新聞取次店の男が梯子の上で候補者の名の下へ次々に得票数を書き入れていた。ブルジョア諸政党の候補者との間に大きな開きはあつたが、それに並んで労働者候補者の得票数も刻々にふえていつた。しかしふいに十一時ごろ、二千八百台でそれが停つてしまつた。あくる日の朝、それがどの新聞にも二百何票と出ているのを見ているところへ近所の山口がやつてきて、彼は昨日渋谷で見ていたが、やはり十一時ごろ三千票少し出たところで停つて、おかしいと思つてゐるうちに候補者の名前の上へ白紙が貼られたことを話していつた。

それから三四日して文化団体の中央事務所で働いていた峰がやられた。彼は半年ほど前保釈で出てきて最近その事務所で事務を見ていた男だつたが、その日事務所へスパイが四五人来て何か探し始めた隙に自分の手提を近所のよその物置へかくしてきた。そしてスパイが帰つてしまつたのでそれを取りに行つたのをつけられて捕まつた。手提から『赤旗』が出てきたのだつた。この場合の『赤旗』の性質は田原にはわからなかつた。しかしそれがどうであるにしろ、峰が『赤旗』を事務所へ持つてきたことは一つの合法主義的な誤りと思われた。峰は正しい政治的立場に立つていたし、彼の履歴は（田原は彼を五六年前学生として知つてもいた）彼の人間性質についてかなりの信用を与えてもいたが、最近事務所で働くようになったこと以外に文化的領域で仕事をしたことはなかつた。保釈中の人々の間での『赤旗』の配布が推測されたと同時に、彼が文化団体内の非合法グループのどれにもおそらく属してゐないことがいろんな他の事情から田原には帰結された。もし彼の逮捕された神田の事務所が、その——彼の手提から出てきた『赤旗』の——配布網の属してゐる組織の合法的事務所であつたとしたら、そこへ敵